

立花隆のオーディオ評論家探検

音の求道者

# 長岡鉄男

N  
e  
w  
Y  
e  
a  
r  
A  
u  
d  
i  
o  
S  
p  
e  
c  
i  
a  
l

「田中角栄研究」から近作「脳死」まで次々に衝撃の書を発表して世間を震撼させる立花隆氏にとって、オーディオもまた知的好奇心をかきたてられる対象のひとつ。そんな立花氏が、強烈な個性を放つオーディオ評論家二人を訪ねる。



撮影・菊地英二





う一台の奇妙なかつこうをしたスピーカーが  
ならんでいる。鳥か首を伸ばしたような形。  
長岡ファンならご存知のD-101「スワン」で  
ある。

長岡さんは説明抜きで、いきなり一枚のC  
Dをかけた。芸能山城組の「輪廻交響楽」だ。  
冒頭いきなり、タダーンと太鼓が強烈に鳴り、  
長い余韻を引いて消えていく。それを聴いた  
だけで、椅子からころげ落ちるほどびっくり  
した。

手作りのこんな奇妙な形をしたちっぽけな  
スピーカーから、まさかそんな強烈な低音が  
出てくるとは思わなかったのである。

「これはね、10センチフルレンジ一発のスピ  
ーカーなんですよ」

「えっ、10センチ一発?!」

ウソだろうと思った。

「みんなウソだろうというんですよ」

長岡さんは、当方の疑わし気な表情 早  
く見抜いたらしい。

「みんなあの下の方の箱の部分にウーファーが入  
っているんだと思うんです。わざわざのぞ  
きにいく人もいます。だけどあの中には何もな  
いんです。ちょっと複雑な作りのバックロ  
ードホーンになっているだけ」

私も信じられなくて、下の箱の開口部をの  
ぞいてみた。どうしてこんな強烈な低音が10  
センチフルレンジから出てくるのか。いろい  
ろ説明を受けたが、いまでも信じられない。

「ステレオの原点を追及していったら、こう  
いうものになったんです。まず、音源は点音  
源が理想。点音源に近づくほど定位がよくな  
る。そして、スピーカーが小さくなれば、振  
動板も小さく軽くなって、どんな微小信号に  
も素早くレスポンスするから、ダイナミック  
レンジが広がる。大きなスピーカーはどう  
してもコーンが重くなり、エッジが固くなる  
から、小さな信号じゃ動かない。ダイ  
ナミックレンジが狭い。そして、システムスピー  
ーカーだとネットワークやアッテネーターが入  
って音を悪くするけど、フルレンジなら何も入  
らないからそれだけ音がよくなる。小型スピ

「やあ、いらっしやい」

と、早速にリスニングルームに通される。

かねてオーディオ誌の記事で、この部屋の  
写真は何度か見ているので、はじめてのよう  
な気がしない。スピーカーのD-70と、アン  
プのLo-D HMA9500IIとは、長岡さんのト  
レードマークのようなものだ。どちらも、こ  
れまた長岡さんのトレードマークの鉛板がギ  
ッチリと積まれている。

「鉛をのせて音がよくなるわけがないと、昔  
はずいぶんバカにされましたよ。だけど、見  
てごらんさい。テクニクスのアンプにしても  
、オンキョーのアンプにしても、新しいの  
は振動をおさえこむために天板に鉛を入れて  
マスをつけるようになった。スピーカーだっ

てそうですよ。スピーカーの理想は、振動板  
だけが軽々と動いて、あとはいっさい動か  
ないこと。それにはキャビネットに充分なマス  
をつけることが重要なんです。市販のスピー  
ーカーは、みんな箱にマスが足りない。だから  
立ち上がりが悪い。このD-70は、上に鉛が  
のっている上に、箱の中に砂が入っているか  
ら全体で120キロはあるんですよ。これをほ  
くが何度も指摘してきたので、最近のスピー  
ーカーはみんな重くなってきた」

なるほど、D-70は、ちょっと押してみ  
てもビクともしない。

### スワンの衝撃

今日はこのおなじみのD-70の隣りに、も



別冊F Mfan 49号で製作したスワンの前に、どうして  
コイツからあんなスゴイ音が出るんだろう……不思議  
そうな立花さん。

ホントにウーファーはないのかなあ。

長岡オーディオの小道具のひとつ、鉛板を手。

②



2人とも「Ocora」レーベルのレコードが好きで、ここでも意気投合。

カーが弱い低音は、バックロードのホーンで出してやればよい」

### これは奇蹟のスピーカー

それだけ説明を受けても、やはり不思議だ。ここで用いられているスピーカーのユニットは、FE-106というわずかに6,000円のユニットなのだ。あとは15ミリ厚のベニア板一枚だけなのである。どんなに高級なベニア板を使っても一本2万円しないのである。

それでこれだけの音がするのだ。私は愕然とした。我家ではマルチの巨大システムを鳴らしている。片チャンネル4本のスピーカー計すると百万円は軽く超える。それとくらべてどうかといえば、もちろん、音質と周波数レンジでは我家のほうが優る。しかし、市販スピーカーの20万円クラスならスワンとどちらがよいかわからない。ダイナミックレンジは互角。定位はスワンの方が圧倒的によい。巨大システムは定位に弱い。点音源のよさをスワンで思い知らされた。定位がよいことが、こんなにもステレオ感を向上させるものか。スワンにはもう一つの利点がある。

「長いバックロードホーンがかかっているから、低音が8ミリ秒遅れて後部から出る。このディレイ効果で、音場感が出るんです」

まさしくその通りで、これは10センチ発なのにも、自然な音場型スピーカーでもあるのだ。定位のよさと音場感で録音がよいソフトなら、本当に目の前に音源像が浮かびあがってくる。奇蹟のスピーカーとしかいいよう

がない。これまで100種を超えるスピーカーを作ってきた長岡さん自身が、「数年来の傑作。音場再生ファンには絶対の自信をもって勧める」

と自画自讃しているのもむべなるかなである。

スワンを聴いて、この人がスピーカー自作派から神様のごとく尊敬されている理由がよく分かった。

私は小学生のときから工作には自信がないので、スピーカーを自作したことはない。長岡さんの製作記事も読んでるだけで面白いから読むには読むのだが、実際に作ったことはない。だから、今日スワンを聴くまでは、その真価を知らなかった。後で「FMfan(別冊)」のバックナンバーをひっくり返してみたら、スワンの製作記事も読むには読んだ記事だった。しかし、まさか本当にこれほど音がいいスピーカーとは知らず、「数年来の傑作」などというくだりも読みすごしていたのだ。

しかし、編集部に聞くと、どうやらスワンを自作した人々の口コミでこのスピーカーの威力が知れわたったらしく、バックナンバーを求める注文が叫びもきらず、ついに在庫全部が売れてしまって、いまや一冊もないのだそうだ。そのあとも記事コピーを求める手紙がつついて、編集部はネを上げているそうである。

「だから、もうスワンをほめるのはやめにし



立花さんが特参したソフト。自宅録音のインド音楽もある。

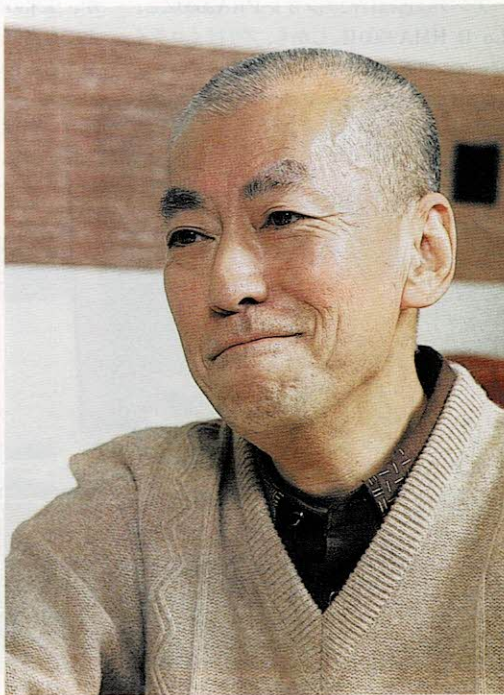
てください」

という編集部への要請だが、これほどのスピーカーに出会ってほめないわけにはいかない。ただし、編集部への苦勞を思っ、次のことを書き添えておく。スワンの製作記事コピーがほしい人は、必ず(必ずである)、返信用の封筒に自分で宛名を書き切手を張ったものを添えた上で申し込むこと。あるいはいっそ、ユニットのメーカーであるフォステクスが、ユニットにベニア板をカットしたものをつけてキットの形にして売っているから、それを直接購入することだ。

だが、私のように工作が苦手なものはどうすればよいのだろうか。フォステクスでもどこでもよいから、スワンを製作して売り出してくれないだろうか。

### シンプルで安くて、質がよく……

スワンの紹介がだいぶ長くなってしまった



④ ③

スワンに対する驚き方を見てこの人はタダモンじゃないなと……長岡鉄男

立花さんとはFMfan 創刊20周年のパーティーでお目にかかったのが最初。今回が2回目だが、何年も前からつきあいの感じて、アツという間に4時間もたってしまい、近くのウナギ屋で夕食までつきあうことになった。こっちはオーディオ・クリニックなどでインタビューは慣れているつもりだが、立花さんはさすがに超ベテランという感じで、すばやくメモをとりながら、しかも、視線と言葉は途切れることなくこちらに向けられている。こういう芸当は筆者には出来ない。筆者の場合はメモをとると流石か中断してしまうのでメモをなしてやっているから、後で思い出すのが一苦労である。

立花さんとは音楽談議、オーディオ談議、いろいろやろうと思っていたのだが、一方的に聞かれ役になってしまった。自宅でコンサートを開き、シェ・タチバナというレーベルでLPを出し、今

度はCDも出すという方。筆者も来年はA V ルーム新築を予定しているの、参考になる話が聞けたらと思っていたのだが、次の機会に期待しよう。とにかく、ロッキードから脳死まで、守備範囲の広い立花さん、オーディオの方もなかなかのもので、それはスワンを聴いた時の驚き方で分かった。スワンを聴いて驚いた人という、スピーカーで有名な某メーカーのエンジニア、同じく某メーカーのエンジニア、山城祥二さん、そして立花隆さんと、つまりベテランなのである。

音楽談議、オーディオ談議もさることながら、本当のところ、筆者が一番関心を持っていたのは、政治、社会、経済、宗教といった問題で、そこの方面でいろいろ聞いてみたいこと、聞いてほしいことがたくさんあったのだが、ついにひとつも話題にならなかったのは残念。これも次の機会に期待しよう。



部屋の隅にあるスピーカーをのぞき込む立花さん。

が、このスピーカーにこそ長岡さんの真骨頂があらわれている。シンプルで、安くて、質がよいのである。すべてにそうなのだ。高級な銘柄品はまるでない。あえていえば、CDプレイヤーにソニーのセバレット型を使っていることと、カートリッジにビクターのL1000を使っていることくらいだ。

アンプは古ぼけたデンオン PRA2000Z と、Lo-D HMA9500II。しかも、プリはイコライザーアンプとヘッドアンプしか使っていない。



インタビューはお手のもの長岡さんも、聞かれ役に回ると勝手が違う？ 何せ相手は「取材の鬼」なのだ。



立花さんは「シェ・タチバナ」という自分のレーベルを持ち、先ごろ吉原すみれの立花邸での演奏をCDにして87早々に発売。当日はそのPCM録音テープを持参して試聴（ソニーSL-H F505+PCM-553ESD使用）。

と思ってしまう。

分からないコトがあるからオーディオは面白い

しかし長岡さんは、今度はレコードを、今度はCDをと私か注文するたびに、いとも気軽に立ち上がって、隣の部屋に行って接続コードをつなぎかえてくださる。その姿を見ると、自分のルーズさか叱られているような気がしてきた。

裏にまわると、私のところは接続コードのジャングルになっているが、長岡さんのものは、不要なものは一切ないから、シンプルそのものである。私はそれを、我家のジャングルと心の中ひそかにひきくらべ、心の中で赤面した。

コード類がまた、安くて質がよい長岡イズムそのものである。これも長岡ファンにはおなじみの、電力線用キャプタイヤケーブルの極太のものがそのままスピーカーケーブルだし、中太のキャプタイヤに銅ハクを巻きつけたものが自作ピンコードだ。

すみからすみまで見事に貫徹した長岡イズムにただただ感嘆しつつも、最後にこんなことを聞いてみた。

「でも、いろんな試みをして失敗することもあるでしょう」

「ええ、そりゃもう失敗だらけですよ。なんでもやってみないと結末は分からない。スピーカーなんか、いつもバクチですよ。つい先日も製作失敗記を雑誌に書いたばかり。だけど、失敗も意味があるんです。失敗するといろんなことが分かる。逆にうまくいったとき、なぜいいのかよく分からないこともある。だけどそれでいいんですよ。やってもやってもよく分からないところが残るから、オーディオは趣味たりうんです。全部分かったら趣味にならない」

それを聞いてなんとなく安心した。安心すると同時に長岡さんはやっぱり求道者なのだなと思った。いや長岡さんだけでなく、オーディオマニアはみんな求道者なのである。みな手さぐりで、きわめつくせない道をきわめようとしているのである。

※次号は音場追求に精魂傾ける高島誠氏を訪ねます。





音源を替えるたびに長岡さんは裏へ回って結線する。このマメさに立花さんはいたく感心する。



長岡邸の裏庭で。「もうすぐここにAVルームを作る予定です」とその模型を手に楽しそうに語る長岡さん。「じゃあその時もう一度お邪魔したいですね」と立花さん。

⑤